江戸文學圖録

京都帝國大学
國文学會編

藤井博士
還曆記念

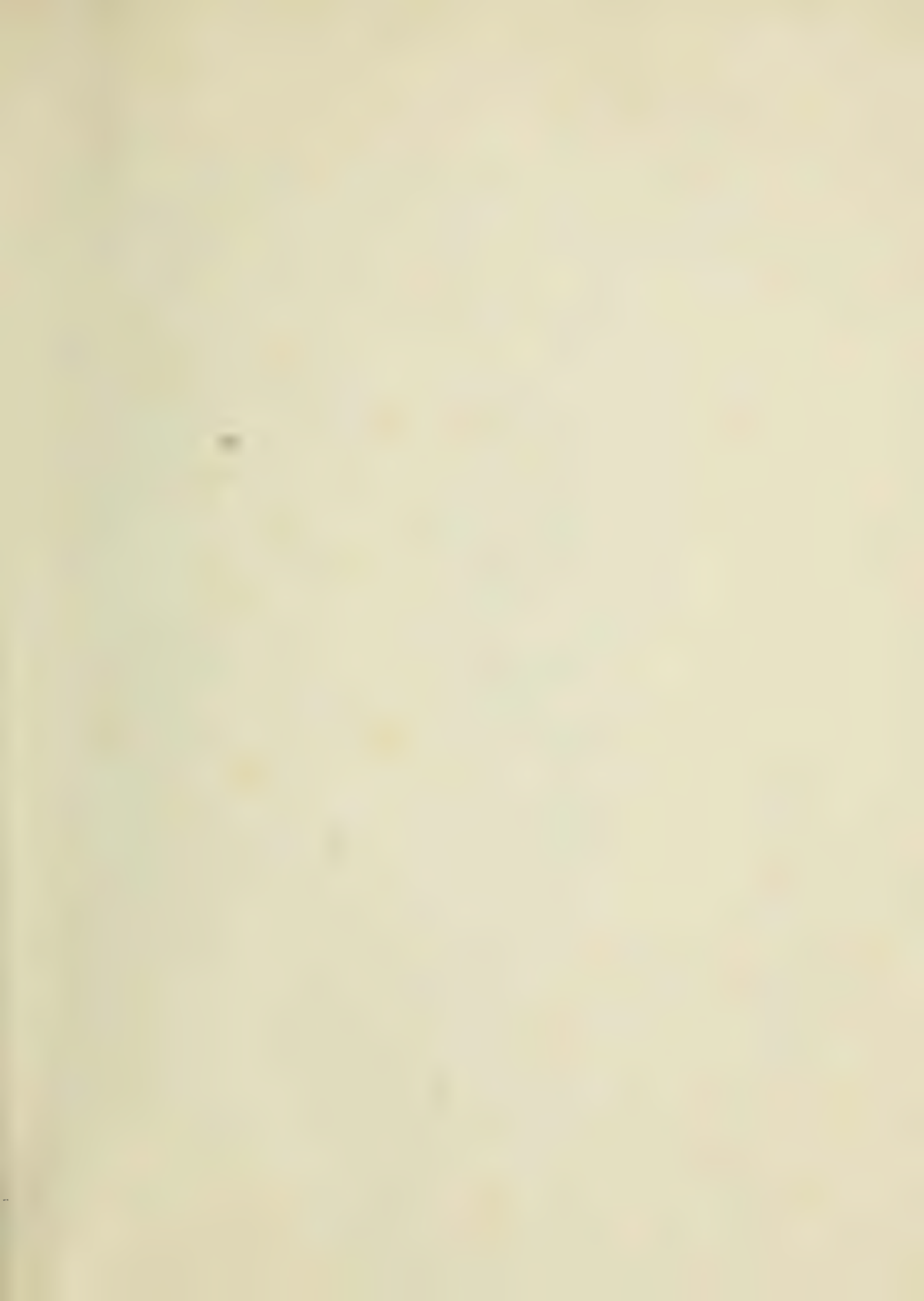
江戸文學圖録

紫影藤井先生明治二十七年東京帝國大學を出で給ひしより學びの道に教への場におりたちいそしみ給へる月日の數も重なりて三十餘年去夏七月十五日を以て華甲の壽を迎へ給ひ筆硯ます〱健かなり生等その喜びを記念せむが爲に一書を編し名づけて江戸文學圖録といふ

先生によりまことの色香知りそめし花の千種の限りもなければそが中にゆかりの色ばかりを武藏野の春秋にたづね集めてこの園に移しうゑしが百二十六類二百九十二點におよびぬるなり

その花のさきてみのらむ種子とりて
君がよはひの數にかぞへむ

昭和四年八月

後學　義則　識

凡例

一、本書は江戸時代の文學書中、代表的なものを選んで、その原本の面目を一般に知らしめる目的を以て、編纂したものである。隨つて必ずしも稀覯の珍籍を採收したわけではない。

一、原本は努めて初版の善本により、且つ異版あるものはこれを併せ收めるつもりであつたが、編者の微力な爲めに、粗漏不備も少からぬことゝ思ふ。

一、解說は初學者の便に資するに過ぎないので、すべて簡略に從つた。なほ寫眞版には一々番號を附し、解說の番號と照應するに便した。

一、本書の編纂に當り、藤井乙男先生は自ら本書に收めた大部分の原本を貸與され、なほ伊藤松宇・石田元季・加賀豐三郎・角田竹涼・南木芳太郎・三村淸三郎・山口剛等の諸氏も、各々その藏本を貸與され、若くは寫眞を寄贈されるなど、甚大の便宜を與へられた。記して深く諸家の厚意を謝する。なほ其他公私の圖書館・文庫の好意に負ふ所が多い。

一、本書の裝幀は津田靑楓畫伯を煩はし、又扉紙の題字は新村出博士の揮毫を乞うた。兩氏の好意をこゝに謝する

一、本書の解說には會員加藤順三・潁原退藏・能勢朝次・金子實英が主として之れに當つた。

昭和四年十二月

京都帝國大學內

國文學會

伊曽保物語　上

伊曽保物語 中
第三十　むまとしゝの事

一 ながき物のまれく

それ漢朝のいにしへをきけるにためしにぞ
堯舜之代七百年。周之代八百年。前漢
後漢四百年。我朝にも秋代とをしゝて八
十三万六千八百余歳とや。今人王之代々成て
もみもそ河の流なく。百王万家の代々ぞり
をとに恋てもながきものハ天竺乃石乃橋にかしま
宇治橋。勢田乃橋。回廊のながきハつくしの。三十三間
鎌倉之建長寺廊下。通天橋。天橋立。こがらき
海士のたく縄。さるやまのびの。露のいの

此たび草紙ハ式へつゞく此例り子硯ネ
ほかひ筆にまかせて書集むる心
あやれかやたうさや似を天京 菱観王
御読ありてありたうさるかくしよろ
しきかたなけ情の味ひく筆の冗
ら給ふとそ

慶安弐己丑年 仲春良辰

藤井吉兵衛尉新刊

11

12

13

棠陰比事物語巻第一

14

15

16

17

二人比丘尼

寛文六年龍集丙午正月下澣

雲樵

伽婢子巻之一

竜宮の上棟

22

23

24

男色大鑑
絵入
六

男色大鑑第八巻終

貞享四丁卯年正月吉日

大坂伏見呉服町淀屋橋筋

書林　深江屋太郎兵衛板

京二条通　山崎屋市兵衛行

一流
御油

立身大福帳
二

39

44

45

47

48

49

52

54

女色方便の一枚起請

59

19

日待乃とき
村

68

序

文に曰く浮世ハ夢のごとし歓をなす事
いくばくぞや誠にしかり金々先生の一
生の栄花も邯鄲の枕のうへの夢とひとしく
粟粒一炊のごとし金々先生ハ何人と
いふ事をしらず古今三鳥の
伝のごとく金ある者ハ金々先生となり
金なきものハゆふでく頓直となるさすれバ
金々先生ハ一人の名にあらず
神銭論にいはゆる是を得れバ
貴く是を失へバ
賤しと
云

画工　戀川春町戯作

69

71

鸚鵡返文武二道
中
寛政
恋川春町作
北尾政美画

寛政二
心学早染艸
大極上
請合売
心学早染艸 下
上中下

78

臺治惜序

松江子氏中村号杢兵衛妓優兒也頻年囂羨名於長安日々富姿色月々長歌舞其上劇場也巧笑辟易花羨目悩殺人鼻以足穿石女之腸當以堪盛老僧之涎夫始而入場者憎悝不厭擲爺弘賈之身臺

80

81

82

近覧異素六帖太素可以淫
哉淫而後為萬々多々之色
如夫有色則必有想有想則
樂亦在其中矣二十五有之
中有北鬱單越又名北倶盧
洲翻勝處勝東南西之三洲
大樂長壽無憂管弦之絶地
也事見寶雲經當今謂之北
洲皆方語之畧也於爰予序
寶暦七丁丑載孟春良辰
禿々道人

穿當珍話　全

穿當珍話序
八幡太名頭戴烏帽身著素袍
曳長袴而携開扇獨揚言曰寡
人雖得千乘之爵侍従不止過
二冠者一日太郎一日二郎頃

穿當珎話序　一

86

87

寶暦七年丁丑正月

書林　汲古堂
　　　滄浪亭
　　　文英堂

二十一

里宅語先生秘評

世説新語茶

硯蓋　九年房梓

序

蔦井文庫
京傳著
仕懸文庫
大礒廓中突景
鎌倉遊子傳記
蔦唐丸梓
不許半時
先刻御迎

大礒風俗 仕懸文庫　山東京傳著

第一回

東山小妓と携へ漢土の驕者もいまだ
縲泉舗の出番のちょんきり揃ひ酒肆
乃枝鰲ぐるのたのしき事を知るべからず
宴ハ後鳥羽院の御宇文治建久の昔
蹴鞠の興にあそぶ一ツの女郎あり大磯
とぞなく家に来りて陶ある侍ふ

94

目録

第一回

第二回

第三回

手段詰物娼妓絹籭

山東京傳著

第一回

95

100

鹿馬輔著

揩謝羅子

唐土の親玉がつゞけて曰。若き時ハ血氣未定之。戒めて
謹しむ色にありと。これを守るものハ。今の
まづ五郎か。腐る儒者の息子ハかりハ。今の
大通ハ。口に美食をこのみ眼にハふんぶん人情の
ごしとさせ。耳にハ河東節の情をきかせし。
鼻にハじやこうの匂ひをひきさせ。樂にる
ゐて煙草が好きなり。風流を辞てさけを

99

101

102

吸露庵綾足大人著

本朝水滸傳

京師書林發行

本朝水滸傳序

103

八七

口吐出。雉雊竜戦。自以為杜撰。則
摘読之者。固当不謂信也。豈
可求醜脣平鼻之報哉。明和戊
子晩春。雨霽月朦朧之夜。窓下
編成。以畀梓氏。題曰雨月物語。
云。剪枝畸人書。

雨月物語巻之一

白峯

あふ坂の関守にゆるされてより。秋こし山の黄葉見過しがた
く。浜千鳥の跡ふみつくる鳴海がた。不尽の高嶺の煙。浮嶋
がはら。清見が関。大磯小いその浦々。むらさき艶ふ武蔵野
の原。塩竈の和たる朝げしき。象潟の蜑が苫や。佐野の
舟梁。木曽の桟橋。心のとゞまらぬかたぞなきに。猶西の国の
歌枕見まほしとて。仁安三年の秋は。葭がちる難波を経
て。須磨明石の浦ふく風を身にしめつも。行々讃岐の
真尾坂の林といふにしばらく笻を植む。草枕はるけき旅路
の労にもあらで。観念修行の便せし庵なりけり。この里の

五

108

昔話稲妻表紙巻之五下冊終

江戸
醒醒齋山東京傳著
一陽齋歌川豊國畫

剞劂氏
小泉新八郎

里見八犬傳
第二輯
巻

浪中得上龍門去
不歎江河歲月遅

根奈志具佐　一之巻

公無渡河公竟渡河堕河而死当奈公何と
詠じけん狂夫の古事は溺て死るを
知て止ざる妹子の歎かやさしけれバ宝
暦十あまり三の年水無月の比荻野八重桐
といへる俳優人の水に入て死たる世の話
沙汰まちまちにして定まる所なし人
あるひハ東方朔が臓の白と
世俗の讒言を蒙んやう憤て湘江に沈し屈
原が流れもならず龍宮の玉を取んと海底に沈

116

115

117

118

田舎芝居

万象亭 著

○序冒

越後の雪ハ之を聞て俗談に書入る。
こまし踏の一ッかしらハ鬘より来る鞴
箱も縞の帷子男留をと見る田舎の
晒道を。ゆかしく若者ハ大沼那妻
有のに。蔦蘿坂村の百姓ともせ。立派よ

右之本以作者書捨之原本令校合一過畢師如大象弟子如猿猴松採不足三本筆毛補其脫漏云爾

門人 千差萬別 天笠老人

享和元年辛酉七月吉日

書林 浪華 凌雲堂
東都 千鶴堂 梓

道中膝栗毛序

浮世道中膝栗毛初篇

発端

十返舎一九著

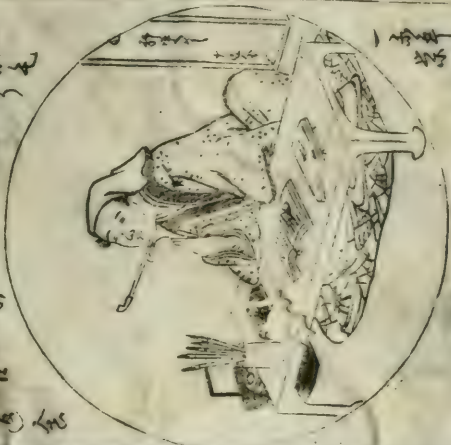
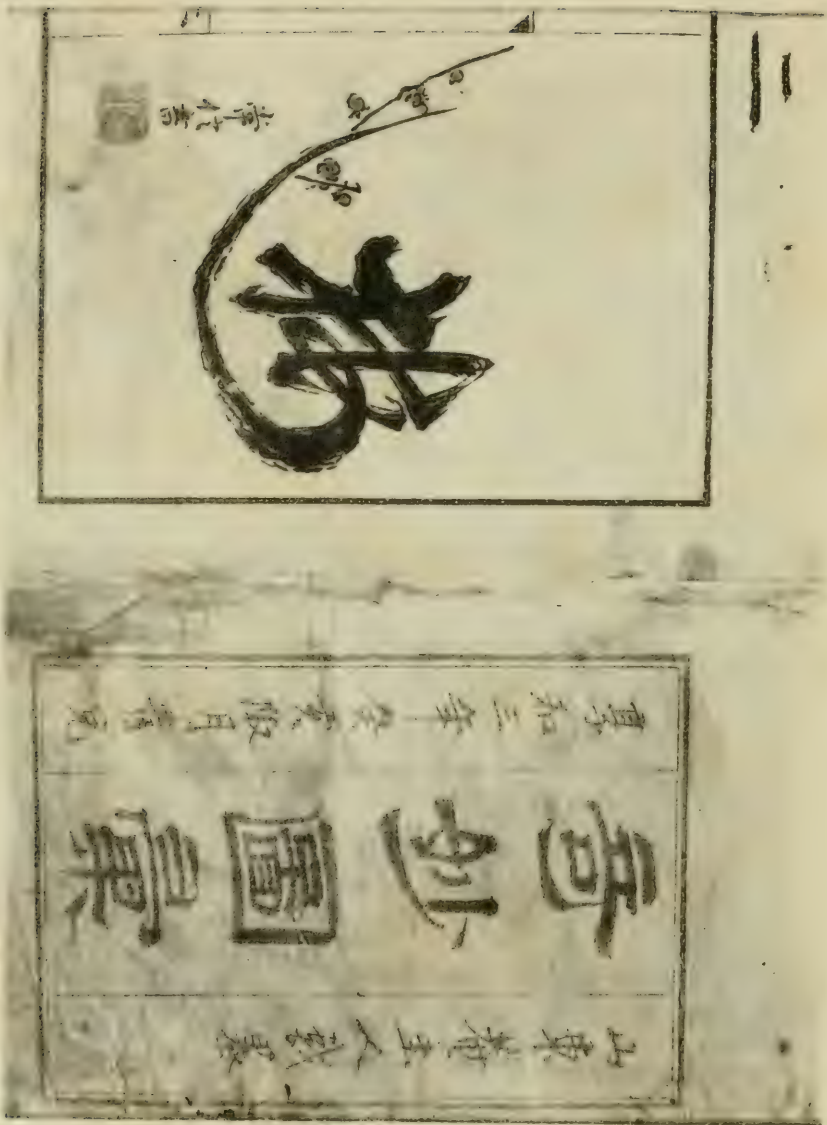
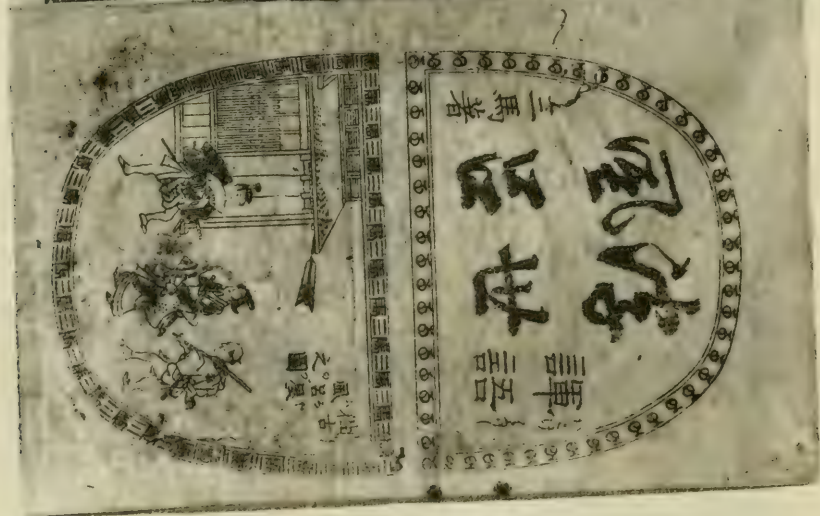
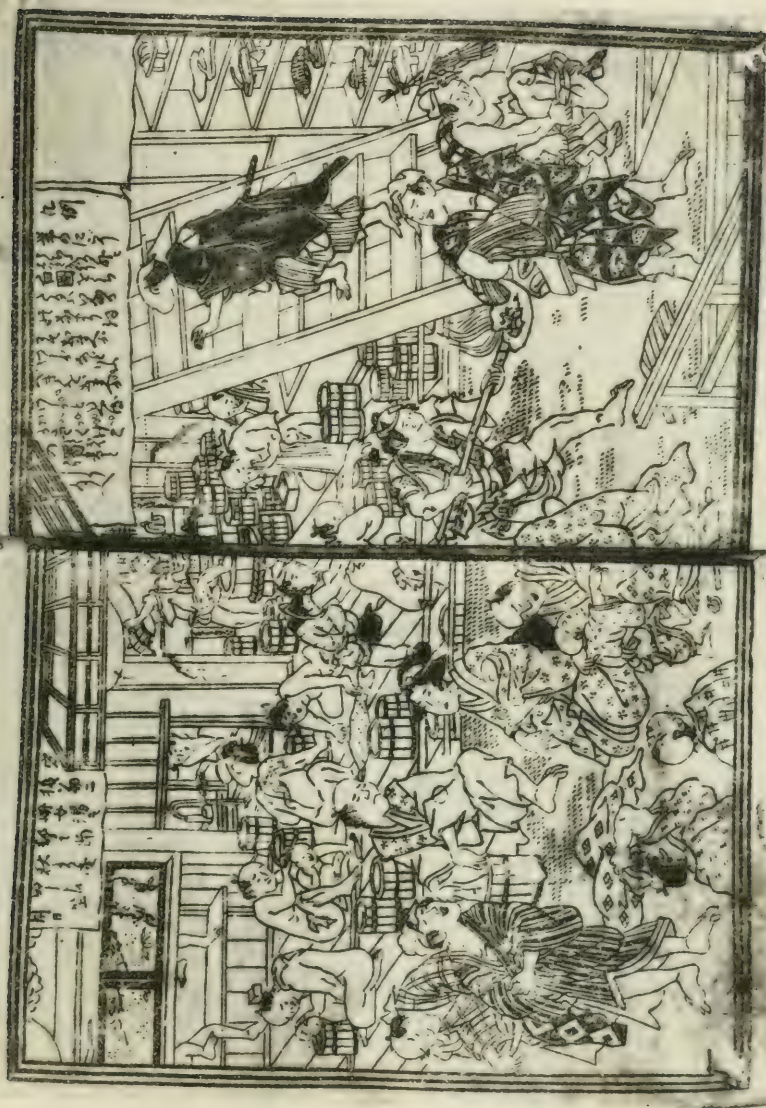
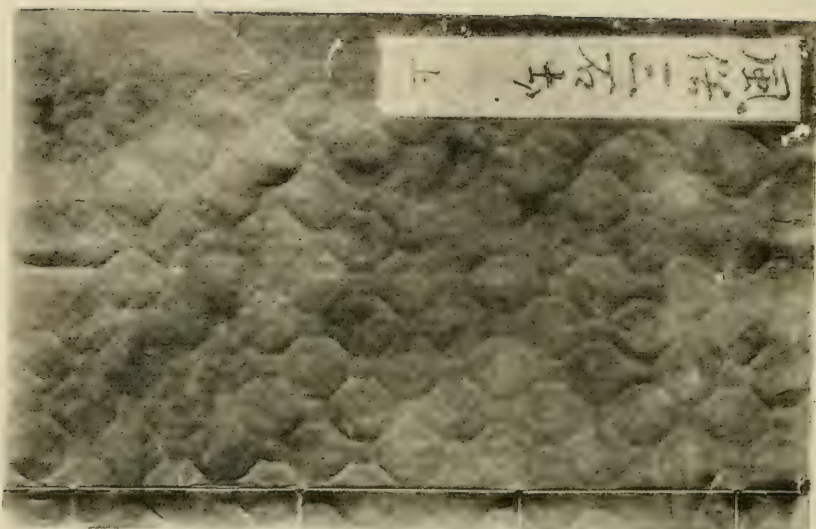
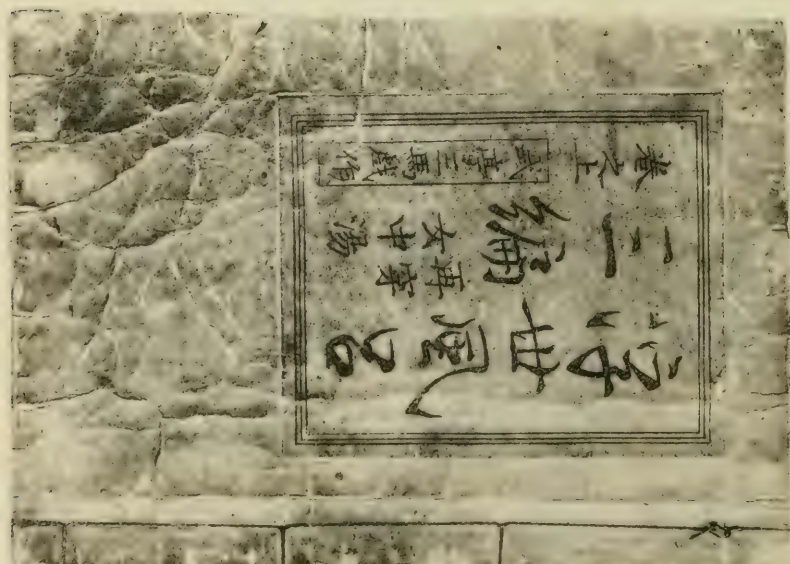
126

127

128

131

132

133

無量屁而又有無量中落屁猶
可捨中落不可悟惑歎之餘以
夢鹸屁之數言爲小序云
天保十二年辛丑之春
安穴道人撰

風俗三石士巻之上
太平舘胴脉先生遺稿
夏の月夜は頃いさしなり。闇の夜蛍とび
ちひ雨なんどの降きへてもをかしぶいつとに
月夜に米の飯ひとつおいあまるかごとく
頂戴しくしい大壁修理権屬神口の
一トうまへ大路次の行あたり無さらしまれ

134

清談山嶺初花初編 上冊

發會 記念の短刀ハ夫婦の縁を久離のたね

七會目

八會目

清談峯初花
作者十返舎一九
板元鶴屋金助
巻
W
61

江戸　曲山人補綴
倣舊圖
國直画
138

140

梅児誉美後編
為永春水著
柳川重信畫

正史
實傳
いろは文庫
十五

第一回

東都

狂訓亭主人著編

143

144

145

ACCOUNT
OF
A JAPANESE ROMANCE.

明治己巳歳初冬

浮世形六扇屏

松園蔵版

ACCOUNT
OF
A JAPANESE ROMANCE.

PART FIRST.

Tamoniara Kadzuyosi, governor of the district of Kuanto,* whose palace was situated in Kamakura, had a numerous band of retainers, and was a powerful nobleman. He was fond of hunting, and had Country-seats at various places, for the purpose of putting up at them when on his excursions after game.

* Comprising eight provinces lying about yedo.

歌川豊國画
柳亭種彦作
愛染明王
勝鬘院
徳若屋
江戸彫工 江川留吉
全 筆者 藍庭晋米

150

151

教訓續下手談義　一
W

154

教訓続下手談義惣目録

寶暦二年秋八月望日

武州多摩郡青柳乃老圃

七十二歳

教訓雑長持 巻第一

青柳散人 単朴志

擧白集
七

橘曙覧
遺稿
志濃夫廼舎歌集
二

志濃夫迺舍翁小像

寛永八年　卯月吉日

あかくはさあつ九月廿九日と申にしん〳〵まとこ
そ申けりあけれハくにきんれのかりまいはやまん[illegible]
ぬやまかれにきんとしれぬんとしてかやれ山への[illegible]
らかとハまことに世にちハかやうり申とと
のかりあくやとどのかりあまひととこひの
ならんしるひと申けり

寛永八年

卯月吉日　志ミづや新兵衛

170

173

右前々之本頗誤依有之
浴流之人憾焉於是令
加賀掾直之以正本開合
章節不遠於一字一點令
開梓矣豈為稽古之一助乎
延寶九辛酉林鐘下澣
四條中鴻橋本町
[illegible]屋吉兵衛
開板

174

177

178

181

心中二ッ腹帯　作者紀海音

182

184

狸和尚勧化帳
化地蔵略縁記
化競丑満鐘
上の巻
化の川原丸版
曲亭馬琴工夫直作

183

185

157

186

けいせい
八文字屋

上
けいせい雄床山二の番

二月廿二日
日本
振袖始
二條通

日本振袖始

けいせい八万日
都万太夫
享保五年

七時雨傘上之巻

惣目録

上之巻

中之巻

下之巻

中山文七

市川團蔵

芳澤いろは

嵐源蔵

柴崎林蔵

中山文五郎

中村元蔵

中村友三

嵐駒鍾

嵐傳五郎

尾上鯉三郎

三桝徳次郎

三桝亀三郎

三桝松五郎

中村条太郎

坂東重太郎

淺尾為十郎

江戸坂正蔵

201

200

チリツ

テチンチリ

トチ、リチリ

チン

トチ、リテレツテ

トチ、リチリツテチン

トチ、リチリチン

トチ、リテツ、テ

紙鳶序

元禄十二己卯暦

永田調兵衛板行

206

207

新曲
四
二より
三より

214

鳰鳥巻之第一

賀之部

蓬莱

215

清元延壽太夫
清元美代太夫
清元美勇喜太夫
清元壽磨太夫
清元菊壽太夫
同 家内太夫
同 壽賀太夫
同 古満太夫
同 民太夫
同 勝美太夫
昔お岩怪談

217

219

220

223

224

225

226

明暦元年乙未五月吉日

敦賀屋久兵衛開板

227

230

231

232

233

南見庵　天和二年三月九

乃日志乃吟なとゝいひて
此ゝ宴をおつむめりし序
をこゝりそし彼上するをきう
て万病圓と京中日本橋よりく
よりきゝおやてゝいかのかと
辞せと　天和二年三月　誹諧の
花乃时綿帳のもとに酒香
かきぬ

武蔵曲

春

梅柳さぞ若衆かな女かな　芭蕉翁 桃青
梅咲り松は何雨に茶を立ル比　杉風
櫻同じ扇の尻ヶ開ル日　三峯
酒のまむ芝蘭分入つきかけ　似春
芝乃岳や白奥咲ぬ礒さくら　四友

猿蓑
乾

ちまち断腸のおもひを叫
び當時あたに懼るへき幻
術なりこれを元として此
集をつくりたて猿みのと名
付申されける是か序もその
心をとりて魂を合せて去来
凡兆のほしげなるにまかせて
書

元禄辛未歳五月下弦
雲竹書ノ

書林

京新町二条上ル
西村平八
大阪心齋橋筋順慶町
柏原屋清右衞門
尾州名古屋本町一丁目
風月堂孫助
江戸本町三丁目
西村源六
同本町通北八丁目通油町
蔦屋重三郎板

245

244

新花つみ

八日

灌佛やもとより腹八かりのやと

卯月八日死んて生るゝ子ハ佛

更衣身にしら露のはしめ哉

衣かへ母なん藤原氏也けり

ほとゝきす哥よむ遊女聞ゆなる

耳うとき父入道よほとゝきす

小原女の五人揃て袷哉

更衣矢瀬の里人ゆかしさよ

春泥句集
上

帋の尾を引たる筆に類をしたゝ
めよとて浪花の夜半亭に於て
六十二翁蕪村書

于時安永丁酉冬十二月七日

春泥発句選
春之部
元旦
ことしゝゝやふ臣し花乃もと
けさ春の氷ともなし水の糟
あそふや静か春の一歩より
素袍着て酢売出ことし武のもと
等持院寓居の頃
えりや若の戸旅の春 畠

257

點譜　硯田舎紀逸(印)
主壽昌　廿五点
四時瑩樓　廿、
冬嶺秀孤松　十五、
秋月明輝　十、
夏雲峯　七、
春水　五、
雁字　三、　屯二、

258

後編
誹風柳樽
近日ニ売出し申候

明和二乙酉七月吉日
板元 下谷竹町二丁目 花屋久治郎

新撰狂哥集巻上

春

小野通のさうやへまゐりてよめる

前大工戸頭法

はるかのうちに匂ふと見えし梅花

まりさけ一川まきはれけるに

さうやの女房遊し

つかれうちに匂ひし梅の花のてく

吾吟我集巻第一

春

極月にし春をまちえし今日人の子をまうけゝる

けゝる日よみ侍る　　　　未得

年の内の春にむまるゝみどり子はこぞとやいはんことしとやいはん

ことしとしる春立る日よめる

冬きえし霞の衣ねはなれぬ姫のむまれ給ひし月なり

春のはじめのこと

初春のくはしらず天下の春をしるかな

年のはじめ汁や肉のゆ山も霞てかすみ侍る花らく、

264

狂歌若葉集下　四方赤良

265

壽

尾陽名越
芦邉田鶴丸

紀安丸

超歳坊

篠野玉涌

豆永金成

明和己丑八月
北山業寂僧都序

太平樂府巻之一
胡逸　滅方海　著
惠萊　安陀羅　挍
五言古詩
呈畏雷上人
降雹澍太雨輾出雷霆音更覗氣色
冷忽無生居心進込二干齢下准頼御

之才之美兼和漢亦猶妍
妹称一對乎
天明乙巳秋七月
四方山人題

本丁文醉巻之一　五言古
二街　腹唐穐人　編選
魚岸　邉越方人　仝校
蓬萊島臺
飾置蓬萊臺細工悉為経竹立七賢
傍松貫太夫爵白沙浦島亀青天頼
朝飾皆謳高砂謡延壽目出度枝栄

二二二

天明丁未孟陬月
四方山人書于巴人亭新宅

狂詩諺解
四方山人編選

七言絶句
郭中禮日　大門

正月二日酒盃臺茶席茶莚勸客杯
人情已厭舊冬苦高慢那從北里回

時圭 名物六路 自鳴鐘トケイ 演禮中庸 禮儀三百
威儀三千 茶ハ小笠原流方「ゟゟへくり 囲居 茶湯秘傳」
まんハ一数寄ハ物をこ紀の名ごつといふおざしきのきれい
さおりこいの物むこ紀御茶の服加減お料理のおんてい
珍客と亭主と双方ともに機嫌よくめでたくの若
松さつまアよろこぶもさうアつて葉もゑだもさかゆるおめ
でたやちよのうちおめでたやせんまうり
ばんぜいのくばんぜいのく万々歳

狂詩諺解 終

四方山人選
通詩選笑知　五七言古　五七言律　近刻

天明三年癸卯正月日

江戸書肆
耕書堂　蔦屋重三郎梓

273

醒睡笑之序

こゝに頃ハ元和九癸亥乃年。天下泰平
人民豊楽の折から某小僧乃時より。
耳にふれておもしろくをかしかりつ
る事を反故の端にとめおきたる
を是年七十にして。策乃廓然明誉
心をやすむるひさしくこゝろさしなか
せし筆の跡をこれかれつらね睡を
さましてちる梅さかまくりやる残

醒睡笑 序

其懐紙をかゝせ給ひ見し書者へまゐらせ

つせられしより貴賤和歌さかへ

しられんため發句こと葉に縁あり

宗匠が代々御子孫繁栄のめでたさ

尤祝をまうすと

右之本徹語每ことし殿

令開板者也

慶安元戊子歳初秋吉旦

277

276

貞享三

桃太郎

むかしくの桃太郎ハ鬼が嶋へ渡り

[illegible]

[illegible]

下司咄屋果取

古諮先此巻是切

鹿子餅 終

明和九年
壬辰正月吉日

本石町四丁目大横町
堀野屋仁兵衛
堀留町二丁目
和泉屋藤吉
下谷御成道唐人飴横町
紙屋徳八

桃源集

吉原三茶三幅一対

評判入札
諸藝の花
開く落札

上吉
入札
坂田藤十郎
上吉の札千百九十三枚

傾城色三味線　京　六巻

元禄十四辛巳年三月吉日

八文字屋

本圖錄は三百部
印行せる限定版
本書はそのうち
第八拾參番也

昭和五年一月十日印刷
昭和五年一月廿日發行

江戸文學圖錄　（定價金貳拾圓）

編輯者　京都帝國大學内・國文學會
裝幀意匠　津田青楓
木版彫刻　南部林次
コロタイプ印刷　小林製版所
本文印刷　田中印刷出版株式會社
製本　中村文光堂
發行者　合資會社ぐろりあ そさえて
代表者　伊藤長藏
神戸市前町十八番
京都市河原町三條南、蓬萊相互館